

所では、明らかに林の色も密度も林相も異っていた。また宗教山地であり、同時に観光地である高尾山の真の姿を、頭をたれ、手をすり合わせて一心に祈っている老人の姿や無邪気に石段を駆け登っていく子供連れの家族の姿に、まざまざと見る思いがした。(1年 沢)

第 2 学 年

すばらしかった富士山巡検 (浅海 教官)

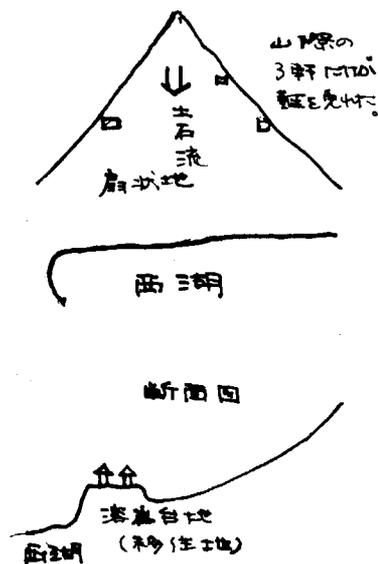
昭和45年10月18日～22日

(第1日)

高尾駅に集合し9:25発の松本行で出発。テストは終わったし、馬肥ゆる秋だし気分良好。上野原付近と猿橋付近で窓の外に続くみごとな河岸段丘について、先生がその地質地形的構造を説明して下さる。大月で下車して、溶岩が道端の崖となって数百m続いているのを観察する。右手の崖に対し、左手は1段低い所に田がありもう1段低い所が川原になっている。昔多量の溶岩が川原をおおい、後に川の侵食が復活してメアンダーにより段丘面ができたとのこと。この溶岩は富士山まで追跡できるそうだ。川原には第3紀の御坂層が広い範囲にわたって露出している。川は地盤の弱いところを選んで流れているのだ。ススキやコスモスが風に揺れていた。第3紀層の基盤岩石でできている岩殿山に登ってから、単線のガタゴト電車に乗り換えて河口湖に向かう。バスを乗り継ぎ、周囲の山々が霧に煙るころ、人気のないガラーンとした西湖ユースホステルに到着。空気が冷たい。

(第2日)

ユースに対し西湖と反対側には第3紀御坂層の山々がせまっている。平地に移るところがいくつもの扇状地となっている。ユースのすぐ後の扇状地上にあったのが根場部落である。約40戸の農家で人々は林業、養蚕、酪農などで細々と暮らしていた。平和であったこの部落が昭和41年26号台風による土石流によりほとんど全戸崩壊、部落の3分の1の死者を出すという大きな災害をうけた。もろい第3紀層が多量の水分



を含んだためである。しかし現在では全員が県の所有地である西湖畔の一段高い溶岩台地に移住し、民宿を営んでいる。災害跡では今もダム工事が行なわれていて、所々大きな岩がころがっていたが、大きな溝が縦横に走り整地も大部進んでいた。民宿用の自給野菜はつくられているが、土地利用はまだ具体化されていないようだ。民宿は全戸新築であり低利とはいえ、借金の返済もこれからたいへんだと思うが、民宿村の経営は好調だということだ。民宿は主婦の内職であり、本職はサラリーマンで自家用車で出勤する家が大部分という話を聞いた時は、少々驚いた。でもよかったと思う。いろいろ話をして下さった農協の人の顔も明るかった。

午後は山歩き。紅葉には間があったのは残念だがそれだけに観光客もまばらでよかった。標高約1,500mの紅葉台からの富士山と、眼下に広がる青木ヶ原樹海はすばらしかった。

(第3日)

晴天。広大な富士山の裾野の広がりや放牧地を左右に眺めながらの有料道路のバスの旅は快適。この辺富士山西麓にはマサと呼ばれる酸性で耕すのが困難な固い土壌が分布し農業を妨げている。白糸の滝を見物し地下水と地質との関係を勉強したあと富士宮に行って湧水帯を見る。山体にしみ込んだ水がこの新旧溶岩の境界にきてやっとなつて湧くのだ。富士山麓開発の1番の問題は水だと言われている。富士宮市民の生活はすべてこの水が中心で製糸紡績業の拠点となっているという。

次に現在注目目的の田子の浦に向かう。かつての田を開き港にして、埋め立てた跡にタンクの並ぶ石油基地ができています。足元のドブ川にはチョコレート色のヘドロがブクブクと泡をふきながら流れ悪臭がする。川岸の工場から、ドボドボと廃水が流れこんでいるのだから無理もない。目を少し速く転ざると貯木場がありそのかなたには工業群と林立する煙突、そのむこうにそびえる煙でくもった富士山は異様だった。こういう光景を目の前にすると圧迫感を感じる。先生からヘドロの害、こうなった原因、過程の考察の講義を伺う。裏道を通っても、行きかう車はダンボールや紙を載せ、家々の軒先にも紙が積みあげてあり、吉原は製糸の町だということが強く感じられた。

2泊3日の短い巡検ではあったけれど、根場では、人間生活は地面の上にあるものであるということに再認識させられた。地質、地形、気候という大きな自然条件の前では小さなものにすぎないような気がした。しかし又根場部落のみごとな復興ぶりにも、目を見張られた。山際の扇状地に残る、数戸の合掌造りに似た農家とがれきと湖側に整然と並んだ色とりどりの屋根の新住宅(なかには鉄筋コンクリ造りも数多くある)の対照は、感激的でさえある。

また田子の浦では、産業の発展によって、人間の生活が片すみに追いやられているような印象をうけた。いままでは立地条件さえ考えればよかったのであろうが、もうそれは許されないのであろう。

この巡検の結果を微音祭で発表することになった。調べるにつれ疑問は次々と出てきたのだが時

間が追っていることもあり、どうにかゴマカシてしまったという感じがする。でもやったことに意義があったと思って満足している。

最後に巡検の楽しさを満喫させて下さった浅海先生に深く感謝致します。 (2年 西谷)

巡検の記録 中国～四国 (正井教官)

昭和45年3月10～13日

2年生の春休み、正井先生の御指導で、集落の観察を主目的とする中国～四国方面への巡検を行った。

第1日目 — 倉敷に到着した時は、雨がしとしとと降るあいにくの天気であったが、その古風な景観にひかれ、私達は傘の行列をつくって歩き始めた。倉敷は古い町並がところどころに残り、細い通路や、昔米の運搬に使われた堀の両側には、白壁に黒の貼り瓦の家が続いている。考古館、美術館、民芸館、歴史館、郷土玩具館等々が、その歴史の古さをよくあらわしているようである。中でも民芸館は、昔の米倉を改装したものだそうである。戦前には紡績だけの軽工業であったが、現在では製鉄と石油の水島工業地帯をひかえているため、岡山・倉敷を中核として広島をしのぐ都市をつくらうという岡山県南100万都市構想にも岡山ほど積極的ではない。

第2日目 — 鷲羽山から下津井を経て、フェリーボートで丸亀へ。いよいよ四国上陸である。船にかわって本州と四国を結ぶ連絡橋については、明石・鳴門架橋、岡山と香川を結ぶ瀬戸大橋、尾道と今治を結ぶ瀬戸内海大橋の3計画がある。これが実現すれば、現在とは較べものにならない程便利になるだろう。ただ、橋ができると瀬戸内海的美観をそこなうという若干の反対もあるそうだ。瀬戸内といえば製塩業が有名だが、以前の上浜式にかわり現在では枝条架流下式の製塩法をとっている。赤字のため政府が保護をしているが、国内消費の殆んどは安価な輸入岩塩によっている。現在の傾向としては、塩田はどんどん埋め立てられて工業地帯へとかわりつつある。フェリーの中では、瀬戸内海の美しい島々がところどころ無残に切りくずされ、削り取られているのが目についたが、道路工事などに使う砂利を採石するためと聞いて驚いた。フェリーの終点丸亀は昔の城下町である。ここから列車でさらに30分、この日の目的地琴平に到着する。琴平は日本の信仰集落の中でも最も典型的な町で、江戸時代から鳥居前町として栄えてきた。現在では観光都市となっており、訪れる人が多い。琴平山中腹の金刀比羅宮に登ると、讃岐平野の散村を一望のもとに見渡すことが